

尼くずれ

今 東 光

昭和33年10月5日
昭和33年10月10日
初版印刷
初版発行

尼くずれ

著作者
今東光

発行者
角川源義

印刷者
守安巖

製本者
鈴木俊一

発行所
角川書店

東京印刷・鈴木製本 落丁・乱丁本はお取替え致します

東京都千代田区富士見町三丁目
振替口座・東京一九五三〇八

二六〇円

目次

尼くずれ

三

河内勘定

五

うたせ舟

七

春日遅々

一七

清貧の賦

一三

安樂行品

一六

裴
幀
杉
本
健
吉

尼
く
ず
れ

神戸元町の駅に省線電車が轟と音立ててすべりこむと、プラットホームに散らかっている紙屑がひらひらと舞い立った。もう一つ前の三宮駅で大半降りてしまったので、がら空きの電車から、ひよろりと下りたのは、青々と頭を剃り、ラクダ色の肩掛けを首に巻き、黒羽二重の道服を着た尼僧が、片手に小さな鞆をさげて、かたことと音立ててフォームを歩いた。

高架線の下から吹きあげてくる冷たい風が、容赦なく裾を吹くと、白衣の裾がまくれて、細っそりとした白い脛が露われた。竹箒を持って掃いていた駅員は珍しい客に、ちよつと眼を瞠ったが、直ぐ気を取り直して埃を舞い立てながら、颯々と掃きはじめた。

（四国へ行く客やな——）

駅員は巡礼の行く土地の尼僧などと考えながら、深沈と更けた夜気の中で白い息を吐いた。実際その想像の通りで、尼僧は階段を下りると改札口を抜けた。駅前にはまだ商店に灯がともっていたが、道が大きく曲ると、その先は真暗だった。いっそ暗い路を歩く方が安全な気がして、何所から吹いてくるのか潮の香の交った夜風が冷たく耳や頭に沁みた。

明るい建物の入口に、こんなに遅いのに靴磨きの爺さんが海から吹いてくる風に曝されながら、客の靴をみがいていた。待合室の中は、がらんとした背中合せに置いてある椅子に、大きな荷物を置いて、頬の紅い若い女がうつらうつらしていた。まったく数えるぐらいしか人がいなかった。

窓口で切符を買い、待合室を出て長い棧橋さんばしをわたると、はじめて波が岸壁がんぺきに打ちつける音がした。一月の終りの海は荒れていることが波の音でわかった。その波のしぶきで濡ぬれているところが夜目にも著しるく光って見えた。大阪の天保山を立てて来た汽船は、どの窓も煌々こうこうと灯りが洩もれているのに、船客の姿はなかった。遅いので皆な寝ているのだろうが、寒い冬の夜にわざわざ甲板に出ている人もないのだ。棧橋から船にわたしたタラップの袂たもとに船員らしい人影と、会社の人らしい陰影が、ぼそぼそと話している。汽船の欄干らんかんに白い制服を着たボーイが、こちらへ来る尼僧を凝然ぎょうぜんと眺めていた。

「こちらへどうぞ」

ボーイの後にしたがって船室へ下りる階段を、聲音おしおとに注意しながら二等室に案内された。扉を開けて入ると、むっと人臭い匂いがした。畳をしいたところに毛布をのべ、それに毛布をかけて客が寝ていた。男と男の間に尼僧は座を占めると、鞆たもとを後の方に置き、道服を脱いだ。立膝りつざんをして白足袋を脱ぎ、それを重ねて足の方に置くと、白衣に白い帯を巻いたままで、

「御免やす」

と誰に言うともなく幽なすかに言いって身体からだを横にした。

ボーイがお茶盆どに土瓶どびんと茶碗ちわんをのせて枕もとに置いてから、

「あ。これは失礼……」

不格好ぶかつこうな煙草盆えんそうぼんを置いて行いった。尼僧は巻煙草を袂たもとから取り出すと、腹這はらばいになって一服吸すった。右隣りはまだ若い商人風の男で、自分の隣りに尼僧が来たということが意識されるのか、わざと

眼をつぶって上を向いたきり身じろぎもしない。

左のは、いかにも脂ぎった土建屋風の男で、じいっと眼尻から此方をうかがっているのが感じられる。こんなのに限って真夜中あたり、少し電気でも翳って薄暗くなると、寝た振りをしながら、毛脛の足を毛布の下から差し込んで来る奴だ。

もっと若い頃、京都の尼衆学林に入學していた時代、休暇で帰国の途中、この航路で隣りに寝ていた行商人に、夜中にあらぬところに手を置かれ、吃驚して跳ね起きたことがあったのを思い出した。うんと寝返りを打った拍子に片手が胸の上にき、その手の下の円い隆起が敏感にその手が目覚めていることを知った。けれども大きな声を出すのも恥ずかしかったので、暫く我慢していると、その手は生きもののようにもぞもぞと動きだし、次第に下腹部の方にさがってくる。我慢にも限度があつて、お腹の丸みをさすつてから、もっと下の方へさがつて来た途端に、

「いやらしいッ」

びしゃりと手を跳ね除けると、その手がきまり悪そうに縮んでいったのは滑稽だった。若いときというものは理由なく恥ずかしいもので、電車の中でお尻を撫でられても騒ぎ立てることをしないから、行儀の悪い手はいろいろなことをするのだ。今ではもうそんな手の甲は、青くなるほど抓つてやることも知っているし、声を立てるのにも遠慮はなくなつたが、興味あり気にじろじろと見られると、矢張り身体がすくむような気がするのは、男の傍に寝るという習慣にないことをしているからだろうか。

間もなく汽船が動きだした気配がする。舷側で波を切る音がする頃は、船室の相客はほとんど寝

入ってしまった。

「あんたは何処までだす」

隣りの土建屋風の親父おやじが、自分も煙草を吸いつけると、いきなり聞いた。

「高松です」

「へえ。町だっか」

「いいえ。ちょっと離れますねん」

「そうだったやろな。お寺いうたら人里離れたとこだすよつてな。お宗旨しゅうしは何でっしゃろ、真言宗だっしゃろな。土地柄で」

「いいえ。浄土宗だす」

「へえ。浄土宗いうたら知恩院さんだっか」

「よう御存じだんな」

「その位のことは知つてま。わても高松の生れですが、もう、ずうつと大阪で暮してまんねや。今度、墓参で帰りまんね。何年振りかだな」

「はあ。奇妙なこともありますな。わたくしも自坊に帰りますねんけど、墓参も兼ねてますねん」

「さよか。墓参同士か。けつたいな因縁いんねんだんな。わての方は八十を五つ六つも越した母親の十三回忌かきだんね。なんぼ生みの親かて、八十を過ぎた婆では恋しゅうも懐しゅうもおまへんな。化けたみたいで」

「まあ。お口の悪い。勿体もったいないこと仰有いまんな」

「いや。ほんまだっせ。女子おとこは、いや、これは失礼ひつれいさんですが、女子ちゅうもんはせいぜい五十九くらいで死んでくれんと困りまんな。わての嬢かみなどもそろそろ五十に手のとどく年頃になりましたよって、言うてやりまんねや。惜しがられる頃に死ななあかんいうてな。八十も越したら、すかたんや」

「そんなら男はんはどないなりまんね」

「男だっか。男はんなんぼになつても若い子が好うますな。また若い女を相手にすると、年を忘れたみたいに元氣になりよりま」

「そんな勝手な」

「イヒ……こりや、どもこも仕様おまへん。男ちゅうもんは昔おきから雄おすですよってな」

男は若い尼僧を相手にして夜話に興おこを湧わかしはじめると、そのひそひそ声が耳について寝られないか、反対の方に寝ている客の間から、

「えへん」

と強い咳せき払いがした。すると男は亀の子のように首を縮めて、

「怒おこつてくさる」

と呟つぶやいた。

それを機しかに尼僧は行儀よく右を下にして横に寝た。土建屋風の男は左を下にして横になっているので、彼女の顔を穴のあくほど見つめる。そうするだろうと思ったので、

「お休み。もう間なしに夜が明けまっさかいに」

と言いながら袂からハンカチーフを出すと、ひらりと顔にかぶせた。

(ウフ……こないすると、もひとつ色っぽいもんな)

土建屋風の男はそんなことを想いながら眼をつぶった。

真夜中、小豆島に寄港したらしかったが、船客は誰も起きなかった。高松直航の人々ばかりだからであらう。

「もう十分で高松港でございます」

ボーイが睡そうな眼をしながら大きな声でアナウンスした。その声を聞くと右隣りの若い商人は、ぱっと毛布を蹴って飛び起きた。彼方此方で話し声がした。尼僧も毛布を手早く折り畳むと、円い船窓からのぞいてみた。まだ暁暗の中に黒々と屋島のあたりが見え、港には明々と灯が点っていた。汽船はゆっくりと港に近づいているとみえて、ゆらゆらとたゆんでいる波に灯影がこぼれ、大きな船影が映っていた。

船が棧橋に横づけになると、船客は黙々と行列して降りた。誰かクシャミをしているのがあった。尼僧は棧橋をわたって、待合室に入って行った。まるで夜更けのように静かで、あたりはまだ暗かった。電車もバスもまだ駛っていない。タクシーだけが、けたたましい爆音を立てて走り去った。すっかり夜が明け放れるには二時間ほどあった。尼僧は鞆に凭れたまま、顔をすっかり肩掛けで隠して時間を潰した。腰かけに坐って身体を縮めていると、そんなに寒くない。燃え残りのストーブの熱気が籠っているからだろう。そうしたままうつらうつらしていた。

眼が覚めたら、すっかり明るくなっていた。

バスで木田郡の三木町で降りた。何の特徴もない町の家並みが街道に沿うている。若し強いて特徴を求めるなら、どの二階家も土蔵造りのように白壁になっていて、二階の縁側などというものが見当らない。そうして小高い円い塚のような山が、まるで饅頭のようにぽこりと立っている。一体、四国の山々は悉くそんな風だ。平地から突兀として円い丘が並んでいる。山脈といったものは奥地に入らないとないらしい。山相学でいうと古い山々なのだ。新しい山々は、荒々しく尖っている。高い。けれども古い山は撫で肩で低い。こういう古い山から貴重な鉱物は出ないそうだ。そういう訳か四国の鉱山はこのような山では見かけない。盆栽の山と思えば間違いないし、南面の山と見れば趣きがある。とりわけ雨後は美しい。乳白色の霧が流れる中に、この円い山が相前後して連なるのは美しい眺めだ。

尼僧はバスを降りると静かな村道を歩いた。この時間には誰にも会わない。みんな畑に出ているからだ。二月の声を聞くと梅の蕾がほつむ四国路は、蔬菜造りに忙しい。村道が大きく曲るところから、前面に大池の堤防が見える。あの池を思うと尼僧は何かしら寒気がしてくるのだ。深い緑を湛えた水面に浮んでいた青い頭と白い顔が今でも忘れられない。

寂光寺といつても村人さえあまり寺号には留意していない。氷上の尼寺という方が通りが好いかもしれない。清冽な水が流れている小溝のほとりから、少し高みにその尼寺がひっそりと建っている。

門柱の立っている脇に、先住の庵主の墓や、同門の尼の墓が並んでいる。彼女はその前で暫く黙禱してから、内玄関の戸を開けた。

「唯今……」

「お帰りやす」

留守を頼んでいた近所のおかみさんは、本堂前の座敷を掃除していたが、声を聞きつけると急いで飛び出してきて鞆を受けとってくれた。

「あ。疲れた」

「御本山の御用は」

「まだ、すまんけん、早う戻りとうなつたで、急いで戻りましたんや」

「お湯湧かしてありまつせ」

「それは有難う」

尼僧は道服どうふくを脱ぐと、廊下をわたって湯殿に行った。白衣を脱いで浴槽よくそうにひたると、次第に身体がとろけるような快感に襲われる。冷え込んだ女体の隅々まで温い血が流れるように感じられる。ゆっくりひたってから流し場へ出て、泡立つ石鹸せっけんで身体を万遍まんべんなく洗っていると、手足の先まで桃色に染った白い身体は、肌理きめが細かいので、つるつると一層滑らかになる。真白な女体に一か所だけ陰翳いんえいのように黒いのは奇妙なものだ。トルコの女は剃って仕舞うそうだが、尼僧にはこんなものは不要ではないかという話が、尼衆学林の寄宿舎にいた時分に、級友の間で真面目に論議されたことを可笑く思い出した。尼僧というものは結婚するのではないから、性生活に必要なものは悉く不必要だという論旨ろんしだった。しかしながらそんなことを言えば授乳に必要な乳房も不必要ということになるが、アマゾン女兵のように切り取ったら命に関わるではないか。血の気の多い時代には極端

に潔癖なだけに、このような論題を笑いもしないで論議したのだ。

そう言えば先住^{せんじゆ}さんがまだ生きて居られた時分、同じ組寺^{くみじ}の明恵尼が遊びに来られると、

「素峯や。ちよつとお使いにいて」

と言つては表に出されたものだ。どんなお話があるのかわからなかったが、明恵さんは素行が悪い評判だったので、若い尼僧に聞かせては不可^{まじ}いと斟酌^{しんしやく}されたのかもしれない。それが或る時、村の酒屋へお砂糖を買いにやらされると、恰度^{ちやうど}、品切れで、その日の夕方にお寺へとどけるといふので手ぶらで帰ってきた。台所から庫裡^{くらり}へ入ると、明恵さんの大きな声が筒抜け^{つつぬけ}に聞えてきた。

「その尼寺は熊本県の南の方の或る山中にありましたんや。そこへ高等学校の白線の入った帽子をかぶつた二人の学生が、もう夕闇^{ゆふぐみ}が迫つて、顔もはつきりわからん時刻に訪ねて来ましたんや」

「道に迷うてですかいな」

「大方そんなことでっしゃろ。あたりに宿屋は無し、泊めてくれと頼みますとな、その尼僧が、御覽の通りの破れ寺で、寝具というてはお客様お一人分よりありません。ジャン拳^{けん}して勝つた方を泊めよう言いましたんや」

「負けたら、わややな」

「まあ、お聞き。負けた御方は、此所から十丁ほどの所に、もう一軒、尼寺があるさかい、御足労でも其所まで歩いて下され、屹度^{きつと}、そこでも泊めて呉れる筈^{はず}というので、二人の学生はジャン拳をして、勝つた方が泊りましたんや。勝つた方は背の高い、もの静かな学生やったそうですわい」

「なるほど」

「夏のことで遠い山中を歩いてきた学生には、お風呂は何よりの御馳走じゃけん。学生は豆ランブの光りをたよりに湯に入ると、嗚呼好え風呂やと唸ったそう。すると暫くして湯殿の外で尼僧が、お背中をお流し申しましようと言をかけると、学生は勿体ない言うて辞退した時、はっと気がついたら尼僧が裸で湯殿に入ってきたと申します」

「えっ。裸で流してあげなさるのか」

「そうや。学生が海老のように縮まる背を柔しく流してあげてから、今度はわたくしを流す番やと学生に白い背をむけたそう。学生はよう背を流さんと」

「どないしたん」

「後から嚙りついたそうや」

「へえ」

「風呂から上って、ひと涼みして、座敷には蚊帳が吊ってあったが、まったく寝床は一つで、学生は寝たそうやが、間もなく尼僧も蚊帳の中へ入って、添い伏したそうだんね」

「そうやろな」

「あくる朝、別れを告げて学生は名残惜しうに立ち去ったそうや。十丁余りも歩いて、友達への誘いに行くと、もう一人の体格の好い学生は、これも残り惜し気に別れを告げて来たそうなが、をしてみるとこの友達の方も矢張り同じようなわけで、こっちの方はもっと色深いか曉になるま寝もやらず睦み合ったそう。もう、こんな話は滅多にないようになったが、昔の尼寺いうもん釋なもんやなあ」